聖霊降臨節第５主日　説教 「因果は巡る糸車」要旨

牧師　黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会　2024 年 6 月 16 日

マタイによる福音書　23:29-39

おはようございます。今日もご一緒に聖書の御言葉に聞いて参りたいと思いますが、ところで、礼拝に集められている私たちがこうして聖書の御言葉に一緒に聞いていくというのはどういうことなのでしょう。前回申し上げたことで言えば、それは、私たち一人ひとりが神様に丸裸にされているということです。だから、私たちはこの日もイエス様の本音を聞き、イエス様ご自身に触れることが許されているのです。なぜなら、創世記３章のアダムとエバの物語で言われているように、子どものように何一つ繕うことなく丸裸の状態でいられる、そして、それが恥ずかしくない、それが罪許された者の姿だからです。

ですから、そんな私たちについて、御言葉はこう語ってくれています。先ず一つは、出エジプト記 19 章 5 節、6 節の御言葉です。「今、もしわたしの声に聞き従いわたしの契約を守るならば　あなたたちはすべての民の間にあって、わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる。」と。そして、もう一つが「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。」とある申命記７章６節の御言葉です。つまり、神様にとって私たちは目に入れても痛くはない存在であり、しかも、それが神様の本音だということです。そして、それは、こうして御言葉に聞く私たちだけではありません。イスラエルの人々はもとより、律法学者、ファリサイ派の人々もまた、私たちと同じように聖なる民、宝の民に属する者なのです。

ですから、神様にそのように覚えられているという点で、彼らと私たちとの間に大きな違いはありません。ところが、イエス様は、そんな彼らについて、ここでもう一つ、別の見方を示すのです。それが、今日、私たちがこうして聞いている御言葉です。そして、それは決して分かりにくいものではありません。ただ、分かりやすい本音というのは、気持ちがあふれ出る反面、人によっては返って分かりにくさを感じたりもするのでしょう。言ってることは分かっても、心が受け付けない、本音にはそういう一面があるからです。なぜなら、その刺々しさが私たちの心をグサリと突き刺すことになるからです。従って、御言葉の語る、聖であり、宝であると語られていることは、どうやらただ素晴らしいだけのものではないようです。それゆえ、イエス様の激しい言葉は、対岸の火事ではすまされない、もしかしたら、私たちの将来の姿を暗示しているとも言えるのです。しかも、イエス様のこのお言葉は、イスラエルがやがてローマによって滅ぼされたように、この 40 年後、その言葉通りに実現することになったのです。

それゆえ、ここでのことは御言葉による歴史の必然性を物語っているとも言えるのでしょう。ですから、そういう意味で、神様に聖なる民、宝の民と呼ばれたイスラエルが例外ではなかったように、いずれにも振れるのが主の民の歴史というものでもあるのでしょう。しかし、イスラエルの始まりを出エジプトの出来事を基点に置いて考えるならば、イスラエルの倍近くを主の恵みの中に過ごして来たのが主の教会に集う私たちであるのです。しかも、私たちはイスラエルのように滅びを経験したわけではありません。ですから、ここに私たちの受けている主の祝福の中身がある、つまりは、彼らではなく、私たちこそが、宝の民、聖なる民と呼ばれるにふさわしいということです。そして、それは、イエス様が私たちと共にいてくださっているからで、このイエス様を通して神様とも私たちが共にあるからです。それが以来 2000 年この方ずっと続いてきた。それゆえ、神様の祝福は私たちにとっては既得権であり、だから、私たちは安心することができるし、安心していいわけです。もっと堂々としていいし、恥ずかしそうに神様に何かのお伺いを立てる必要もない、そう言っていいように思うのです。しかし、それが分かっているからこそ、私たちは返って不安になるのです。それは、イエス様がここで糾弾されていることが、いわばイスラエルの人々の日常についてであるからです。

人々の生活様式、その日常を見ていくとき、そこには、人々の、日々の暮らしへの深い思いを見ることができます。そして、その当時の人々の日常の中に置かれ、また覚えられていたのが、預言者であり、正しい人と言われている人たちでありました。だから、人々はその彼らの名前を石に刻んだのです。それは、共に集い、共に暮らす人々のその日常を支えていたのが石に刻まれた人々のその名前であったからです。そ

して、このことは、先週の午後、墓前礼拝を行ったばかりの私たちにとってはよく分かることです。特に、今年は、私たち藤沢教会にとっては忘れることのできない荒木家の人々を教会墓園に改葬することとなりました。それだけではなく、墓前においてそれ以外の数多くのお名前が刻まれてもいるのです。そして、ここ数年、この墓園が年々賑やかになってきているのですが、それは、藤沢教会がそれだけ神様によって祝福されているからです。そこで、この度、墓地のカロートを拡張して思ったことは、天の御国の賑わいを先取りしているのが藤沢教会であり、つまりは、神様によって祝福されて生きるということは、このような賑わいの中でその生涯を終えるものだということです。なぜなら、神共にいます私たちの日常とは、天と地とが分かれ分かれにあることではなく、主にあっては一つであるからです。

ですから、そこで墓前礼拝において申し上げたことを再度申しますと、一つは、お墓というものの取り扱い方に共同体のあり方とその将来が明らかにされているということです。そして、もう一つが聖書の御言葉が私たちに求めることは、創世記の最後に記されているように、召された人々の亡骸を携えて、終わりまでを歩み続けるのが私たち主の民であるということです。それは、イエス様が「私は世の光である。私に従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と仰るように、それが命の光を持ちつつ歩む私たちの姿であるからです。まただから、このことが私たちの日常を作り上げることにもなるですが、ただ、このことは、私たちだけに許されていることではありません。イエス様が律法学者、ファリサイ派の人々に向かって、「私はお前の子らを何度集めようとしたことか」と仰ったように、神様の顧みのもとにその日常を過ごすイスラエルの人々もまた、私たちと何ら変わらないものであったのです。そして、その中でその敬虔さにおいては他の追随を許さなかったのが律法学者、ファリサイ派の人々でありました。ところが、イエス様はその彼らのことを「あなたたち偽善者は不幸だ」と、また、それに止まらず、「蛇よ、蝮の子らよ」と彼らのことをこう仰るのです。

彼らが「もし先祖の時代に生きていても、預言者の血を流す側には着かなかったであろう」と語っているように、何一つ疑わずに自分自身を歴史の中に位置づけていたのが律法学者、ファリサイ派の人々でありました。ところが、そんな彼らの日常を徹底的に追求されたのがイエス様でありました。それは、イエス様が彼らの歴史を俯瞰し、彼らのやって来たこと、その日常がどんなものであったのかをすべてご存知であったからです。だから、イエス様の目からすると、彼らは変わる必要があった、ところが、彼らは何一つ変わろうともしていなかった。それも、変わらないだけでなく、自分たちのしでかしたことに気がつこうともしていない、ですから、37節でイエス様が「「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」と仰っていることは、彼らに対するイエス様の本音が、まさにコップの水が一杯になってあふれ出て来てしまったということです。

そして、イエス様はそんな彼らのことを偽善と呼ぶのですが、ちなみに、ここでイエス様が仰る偽善とは、大根役者の下手な芝居を指しているわけではありません。役者が役になりきることであって、その本質、その骨の髄までが偽善でしかない、そして、それがイエス様の彼らに向けられた本音ということになるのですが、そこでよくお考えいただきたいことは、相手に対する思いが深ければ、それで本当に人は変わることができるのでしょうか。言われたから変われる、それが実現するならそれは確かにすばらしいことではあるのでしょう。けれども、何を言われたかも気づかずにいる人を、言葉をもってして、ましてや、その気持ちの強さだけで変えることなどできるのでしょうか。もちろん、神の子であるイエス様には、そうしようと思えばできたはずです。けれども、十字架の出来事が示すように、イエス様がどんな言葉を尽くそうとも、どんなに誠実に人と関わろうとも、それで決定的に何かが変わることはなかったのです。イエス様の十字架の出来事はその点を私たちに伝えてくれているわけですが、では、それはどうしてなのでしょうか。

最近よく言われているところで言えば、褒めて人を育てることができなかったからなのでしょうか。それとも、彼らの理解力が足りなかったからなのでしょうか。あるいは、イエス様の伝え方が間違っていたからなのでしょうか。しかし、どんな理由があれ、イエス様が「見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる」と仰ったように、一つ一つの小さな行き違いがやがて大きな渦を巻き起こし、現実となったのです。そして、そうなった原因は、イエス様が「地上に流された正しい人の血はすべ

て、あなたたちに降りかかってくる。はっきり言っておく。これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちに降りかかってくる」とこう仰るように、それは、長年積み重ねられてきた、イスラエルの罪の結果でありました。塵も積もれば山となる、こうしてすべてを押しつぶすことになったのです。ですから、イエス様の仰ることは、因果応報ということでもありましょうし、結果責任、自己責任ということにもなるのでしょう。

従って、イエス様がここで仰っていることは、いわば、神の子ならではの決定論に近いことが語られているように思います。ただし、問題は次のことです。そう運命づけられていたのは、律法学者、ファリサイ派の人々だけではありません。イスラエルの人々もその当事者としてその渦に巻き込まれ、やがて滅びへと向かうことになったのです。それゆえ、イエス様の弟子たちもその例外ではありませんでした。弟子たちがイスラエルという共同体の成員である以上、イエス様がここで仰ることの例外たりえるものではなかったからです。ところが、その彼らがイエス様の十字架と復活を経て、その彼らの上に聖霊が降り、地上に教会が建てられた、このことによって滅びから解放へ、審きから赦しへと、イエス様の教会に連なるすべての人々が因果応報とも言える運命の束縛、その隷属から解き放たれることになったのです。従って、彼らとイエス様の弟子たる私たちとの違いは、教会に連なっているかいなかの一点に掛かっているということです。では、このことは具体的に何を意味するのか、それについて、イエス様は、マルコによる福音書3章28節以下においてこう語ってくれています。

そこでイエス様はこう仰います。「はっきり言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涜の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」と。つまり、聖霊を受け入れるか受け入れないかが彼らと私たちとの決定的な違いだということです。しかし、そこでもし、私たちが聖霊を受け入れることがなければどうなのか、このことはつまり、私たちもまた彼らと同じように滅びへと運命づけられたままであるということです。そして、そこにささやきかけるものが二項対立の図式で語られる「本当か」との声です。ですから、そう考えるなら、ここでイエス様の仰っていることは、頑なさゆえに自分を変えることのできなかった律法学者、ファリサイ派の人々のことを言っているだけではありません。もしかしたら、「そうなったらと考えてしまう」主の教会に集められている私たち一人一人についても、同じように語っているとも言えるのです。そうであれば、イエス様のこの言葉ほど恐ろしいものはありません。そうなるかもしれない、いや、そうなるに違いない、そう思わせる力を持っているからです。なぜなら、私たちは聖霊を受け入れるということが時に分からなくなることがあるからです。けれども、そうであればこそ、そこには、ある一つの大きな意味が置かれているようにも思うのです。それは、イエス様がここで語っておられることが私たちの宗教性、信仰を養うためのものであるということです。、

これはあるお坊さんの受け売りなんですが、宗教教育の第一歩として必要なことは恐い話を言い聞かせることなんだそうです。それは「幽霊の正体見たり枯れ尾花」と言われているように、この世を生きる上で感じる恐怖心、それが人間にとっての基礎的、原始的な宗教性を現しているからなんだそうです。つまり、宗教的に成熟するための第一歩は、この世には人知の及ばぬ境地があるという、この事実を前にして恐れおののく必要があるということです。ただし、怖がらせるだけで終わってしまっては養いにはなりません。そこで、大切なことは導き手です。宗教的な道を進む上で、その人を導いてくれる先達が必要なのです。ですから、そういう意味で、イエス様が私たちの導き手であるのは間違いありません。けれども、イエス様だけでなく、私たちには信仰を持って私たちの先を行く人たちが必要なのです。そして、それは、律法学者、ファリサイ派の人々のような人ではなく、私たちと親身に関わり、天の御国を目指して共に歩む人々です。

そこで皆さんに伺いたいことは、牧師ではない、信仰の先達と言える人の顔を何人くらい思い出すのでしょうか。私の場合、牧師になってからのことを含めれば、両手両足くらいでしょうか。そして、それは、人から尊敬を集める人ばかりでなく、そうではないと思える人も少なからずおりました。まただから、その出会いによって、神様によって支えられ、導かれていることを深く実感させられたわけですが、それゆえ、この出会いはただ素晴らしいだけのものではなかったのです。そこに見たもの

は、矛盾を抱えたままの自分自身の姿であり、矛盾によってギスギスする、人と人との関係性そのものであったからです。けれども、そこには、一つの共通点がありました。それは、「イエス様に手放しでついていこう」という、まっすぐであろうが歪んでいようが、イエス様にすがるしかないというこの思いをはっきりと感じ取ることができたのです。だから、出会った先達は、私のことを使えないからと言って突き放す様なことはありませんでした。また、その反対に、ピタッとしがみつかれ、がんじがらめにされるということもありました。そして、それが私たちの交わりであり、教会というものでもあるのです。

ですから、普通に考えれば、教会にいるということは、いわば、八方塞がりの状態に置かれることであり、それゆえ、それをたった一人で乗り越えることなどできません。しかし、だからこその先達なのです。そういう人たちが交わりの中にいる、それがどれほど大切なことかと思うのです。ただ、どこを探してもそういう人がいなかったならどうなのでしょう。それが律法学者、ファリサイ派の人々に導かれたイスラエルでありました。だから、彼らも、イスラエルの人々も今この瞬間だけの体裁を整えることに地道を挙げることになったのです。分かり合える人々、価値観を共有することの出来る人々、矛盾を互いに引き受け合うのではなく、矛盾を退け、見た目の安心だけを求めようとする人々、イスラエルが目指した社会のあり方とは、そういう人々と一緒にることでありました。そして、それを世のため、人のためだと信じて疑わなかったのが律法学者、ファリサイ派であったのです。

では、そうならないためにはどうすればいいのか。目の前にある矛盾を排除せずに見つめることです。そして、それが主の教会という交わりの中に身を置くということであり、まただから、その矛盾のただ中にあって、私たちは「主の名によって来られる方に、祝福があるように」と叫ぶことになるのです。それは、イエス様がそうであるように、私たちが矛盾を忌み嫌らわず、そこに立って立って立ち続けるからです。そして、その姿を私たちは主の交わりにおいて、イエス様と、そして、イエス様に従い先を歩んだ人々から学ぶのです。ただし、このことは、理屈が先に立ってのことではありません。キリスト教の教えがすべて後からついて来たものであるように、やってみて初めて身につくものでもあるからです。では、私たちはどういう人々の背中を見て歩んでいるのでしょうか。誰の背中を見て、終わりを迎えたらいいのでしょうか。そこで間違いなく言えることは、その背中とは、矛盾を矛盾として受け入れるイエス様のような人たちのことです。そして、主の教会には、イエス様を衣としてまとうそういう人々がいるのです。しかし、そうであればこそ、そこで私たちは問いたくもなるのです。なぜと。どこにと、私たちはこう問いたくなるのです。しかし、そう問い続ける私たちの傍らには、神様とイエス様がおられるだけではありません。背を向ける私たちの傍らにジッと立ち続けてくれている信仰の友、隣人が必ずいるのです。イエス様が神を愛し、隣人を愛せよ仰ったのは、このことに気づきを与えるためで、そして、そのように人と人とを結び合わせ、私たちを一つの教会にしっかりと導き、根ざさせようとしているものが聖霊の働きであるのです。

ですから、教会が分からない、信仰が分からない、すべてが分からないと、もしそう思うことがあればどうすればいいのか。その答えは一つです。それは、主がお立てになった主の教会に立ち続けることです。ただし、このことは同時に、矛盾するものの中に身を置いて、祈り続けることでもあるのでしょう。そこでコペルニクス的転回をたとえて申し上げるなら、この続けること中で、だから、私たちは必ず神様とイエス様との交わりの中に置かれた自らの姿を発見するのです。そして、そのことを聖霊の働きをもって知らされるからこそ、世界の見方を大きく変えられることになるのです。それは、自分に都合よく作り上げられた世界ではありません。神によって作り上げられた世界であり、ここに身を置いているのが私たちであるのです。ですから、私たちに求められていることは、律法学者、ファリサイ派を忌み嫌い、追い出すことではありません。もちろん、だから彼らの言いなりになるということでもありません。イエス様が「お前たちは、『主の名によってこられる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決して私を見ることがない」と仰るように、イエス様はそんな彼らにも天の御国の門戸を開いてくださっているからです。だから、私たちはイエス様が喜ばれることを我が事として行おうとするのです。そのことを主の教会という交わりの中で、今私たちと共にある人々とこうして御言葉に聞き、祈りを共にしつつ、学ぶのです。そして、それが私たちの日常であり、この日常を繰り返す中で、私たちもまた、そういう先達の一人とされていくのです。祈りましょう。